

## Ⅱ 小学部の実践

### 1. 研究の概要

#### (1) 研究の経緯

本校では 昭和54年度の養護学校義務制を前にして 児童生徒の重度化・多様化に対応する学習形態の一つとして集団学習を取り上げ 多くの研究と実践を積み重ねてきた。小学部ではその頃から「部朝の会」の時間が定着し現在に至っている。週2回行われるこの授業は児童と教師が一堂に会し 歌・リズム遊び・ゲームなどを通して遊びそのものを学ぶ機会とするとともに 友達と一緒に活動する楽しさを味わい さらに集団におけるきまりを身につけることなどを目標としてきた。

昨年度は 「豊かな心と生活をめざして」という研究テーマのもと「学習に意欲的に取り組む子」「心を開いて共感できる子」「考え工夫できる子」という願いをもって 「部朝の会」の学習内容を検討し 夏は「青」冬は「白」など季節のイメージを色で感じ取る授業を行ってきた。そして 自然の素材を使った造形遊び 色を象徴的に扱ったゲームや劇遊びなどをふんだんに授業に盛り込み 数々のユニークな活動を展開してきた。こうした様々な取り組みのなかで 「みどりのものなあんだ？」と問うシルエットクイズを通して 「みどり」という言葉を覚えた子や 「ようこそ竜宮城へ」という浦島太郎を題材にした学習でドライアイスの煙に立ち上がってのぞきこむ子など 言葉のひびきや素材に興味をもって学習に集中する様子が多く見られるようになった。また 静かに話を聞く 自分の順番がくるまでじっと待つなど集団の中でのルールを守ることや 友達に前へ出て踊るように促すなど子どもたち同士がかかわり合う様子も増えてきた。

このように 「部朝の会」は集団のダイナミックな力により「互いに影響し合い高め合う場」として子どもたちにとって とても有意義な時間となっており 昨年度の本校教育研究会では「教師と子どもたちが一体となった楽しい雰囲気がとてもよかった」「子どもたちが生き生きとして心が育っている」などの感想を聞くことができた、しかし 「指導の経過や手だてについてもっと詳しく知りたい」「別の角度からも豊かさに迫ることが大切」など今後の参考になるアドバイスや課題もいただいて 今年度も昨年を引き続き「部朝の会」を通して子どもたちの豊かさを育てる研究に取り組んでいくことにした。

#### (2) 研究の目的

子どもは積極的に体を動かして遊んだり 様々な活動に取り組んだりする中で 運動能力を向上させ生活経験を深めていく。さらに そうした過程の中で友達や先生とかかわることにより豊かな感性や社会性も身についてくるものと思われる。本校の小学部の子どもたちも 晴れた日には運動場に駆け出しブランコ ジャングルジム 雲梯 自転車と思いきいの遊具を使って楽しみ 何人かの子どもたちは特定の友達と連れ立って遊んでいる様子が見られる。しかし 一人で同じ遊びを毎日くりかえしているだけという子どもも多くクラス全体がまとまって遊んだり上級生と下級生が互いに意識し合ったりという関係はまだまだ薄いようである。子どもたちがもっと主体的に遊び 友達とのかかわりが多くなれ

ば 喧嘩して気持ちをぶつけ合ったり やさしく相手を思いやったりする機会も増えるはずである。そうした子どもたちのかかわり合いが やがて「豊かな心」「豊かな生活」へとつながっていくのではないかと考える。

そこで今年度は 昨年度の研究の成果や反省を生かし 「部朝の会」の授業を通して 「子どもたち同士の豊かなかかわり合いを育てること」をめざして その指導内容や指導方法の在り方を検討していくことにした。

### (3) 研究の方法

#### ① 学習集団づくり

昨年までの「部朝の会」では 学級ごとに並んで歌を発表したりゲームをしたりしてきたが 今年度は「豊かなかかわり合い」のテーマに沿って 異年齢による集団をつくりそれぞれのグループのかかわりを見ていくことにした。ちょうど本校では全校集会が小学部・中学部・高等部を縦割りにして実施されており年度当初にその集団づくりが行われる。そこで「部朝の会」でもそのときの集団をそのまま活かすことにした。つまり 小学部児童全員を「赤」「白」「黄」「青」の4つのグループに分け 教師もそれぞれに所属し指導にあたった。

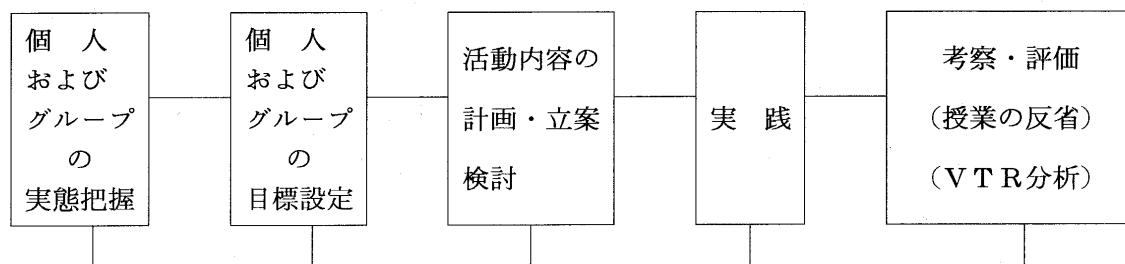
#### ② 指導体制

教師は二つのチームに分かれ メイン指導・サブ指導の役割を季節や単元によって交替して行うこととした。それぞれの役割については次のとおりである。

メイン指導 チーム	……事前に活動内容を計画 立案し 部研究会で提案する。そこで教師全員で活動内容を検討 確認した後 教材づくりや当日の準備 進行までを担当する。特に授業の進め方については、ティームティーチングを効果的に行うため 打ち合わせを綿密に行う。
サブ指導 チーム	……メイン指導者の意図をくみながら 児童と同じ立場に立って授業に参加し 児童の手本となると同時に活動を盛り上げる。

#### ③ 学部研究会

毎週火曜日に学部の研究会を行った。ここでは 子どもの実態や研究のねらいと方法についての共通理解をはかるとともに グループの中でのかかわりという観点でそのグループの目標と一人一人の個人目標を設定した。授業の記録は ねらいや活動内容についてよく把握しているメイン指導チームの一人がVTRを撮影し それを見ながら授業の反省や子どもたちの様子の分析を行った。この一連の研究のながれについては次のとおりである。



図Ⅱ－１

(河 合 利 秋)

## 2. 実践

### (1) ねらいと方法

昨年からはじめたこの研究で「部朝の会」の活動のねらいを 次の三点とした。

- ①学級集団の中では学べない人間関係を学ぶ
- ②一緒にゲームをしたり 歌をうたったりする活動そのものを楽しむ
- ③季節とのかかわり 自然のもの ほんものとの出会いの中に 豊かさを感じる

このなかで昨年度は 特に③に重点をおいて実践した。例えば 春一緑（木々の若葉）—『みどりがいっぱい』のように ひとつの色 ひとつのテーマをしぼることにより一層季節を感じ 子どもらしい創造性や夢を育んできた。これらは豊かな心と生活に連なるものであったといえよう。

今年度は 上記のねらいを次のような点から更に深めることにした。

- ①については異年齢の小集団で活動することにより 学級をこえた集団の所属意識をもつ。そして4つの小集団が競い合うこと 見せ合うこと 共同することを通して 進んで活動し やってみよう・認められ喜ばれる存在になろうと努力する。
- ②については 「～をきなさい」「～をしましょう」といわれて 活動するのではなく 「～をしてみます」「～をしたいな」「～ができるかな」と主体的に学習に取り組む。
- ③についても 自然のもの ほんもの・五感に訴えるものに触れ そこから 驚いたり新しいことを発見したりして 触れてみよう してみようという前向きの気持ちをもつ。

### (2) 指導にあたって

単元など内容の選択においては ①昨年までの活動を継承・発展させたものとして 今月の歌や季節の行事（遠足、ひなまつり）を織り込んでいくことや ②協力し合わなければできない単元を大胆に設定していくことなどを考慮してきた。

特に②については 人とのかかわりの中での豊かさを追求するという今年度のねらいにしたがって 「みんなで一緒に作る」「友だちのすることをよく見て参加する」「グループ同士で競争したりグループの中で協力したりする」などの活動を多く取り入れた。

そのために授業の展開に合わせて留意した手だては次のようなことである。

興味津々 あら不思議 してみたいと一瞬立ちどまる活動にしていくために

- a) 活動内容に合わせて 子どもの場所・グループの位置・並び方の工夫をする
- b) 「どこにあるかな」「何だろうな」と思うように 教材の提示の仕方を工夫する
- c) 教師による演示を多くして 共に楽しむ
- d) 光（電灯）・風（うちわ）・熱（ろうそく）・食べ物（いちごやクッキー）など五感に訴える教材を多く取り入れる

集団の所属意識の成長を促し かかわりを育てるために

- a) 子ども同士の関係をみて 座席や並び方を工夫する
- b) 活動に入る前にグループ毎で相談する
- c) グループ内でお父さん・お母さん・お兄さん・お姉さんの役割を決める
- d) 旗など グループのシンボルになるものを作る
- e) 一人の子供の好きな場所 好きなことを見つけ それを共有し みんなのものにしていく
- f) 得意なことをみんなで見る
- g) グループ同士が競争したり応援したりするゲーム的活動を多く取り入れる
- h) 相手を意識し 二人で協力しなければならないゲームをする
- i) 一つのグループのしていることを みんなで見たり 順番に発表したりしてグループ単位の活動をする
- j) 教師は子どもの話をよくきいて 子どもと子どもをつなぐ役割をする

リーダーを育てるために

- a) お父さん お母さんはグループのリーダーであるということを グループ内の全員が認めるような声かけをする
- b) リーダーの仕事を分かりやすいようにし 継続してできるようにする
- c) リーダーのできることを見つける
- d) リーダーが頑張ったことについて 認め ほめる
- e) 教師がリーダーの良い見本になる

活動そのものを楽しむために

- a) 単発でなく何度か同じ活動を繰り返し見通しを持ちやすくする（慣れる）
- b) 子どもが何をしたらよいのか分かるようにする
  - ・活動そのものや指導の方法は 単純で明快にする
  - ・子どもに分かる声かけや働きかけをする
- c) 雰囲気作りを考える
  - ・自分の着ている洋服も教材と考え 活動にあった服（衣装）を着る
  - ・暗幕 照明などを効果的に使う
- d) みんなで見る みんなで食べる みんなで作るなどの活動をたくさん取り入れる

このようなねらいと方法（配慮・手だて）で 以下の活動を行った。

（浦 田 節 子）

### (3) 活動の内容

#### グループづくり (4月～5月)

新しい友達や先生を迎え 部朝の会でも新たに4つの色の縦割りグループを編成することにした。それぞれのグループで 親しみやすい名前を考え リーダー役の「お父さん」「お母さん」を選んだ。また グループの色と名前になんだ旗を協力して作り それを使ったゲームを楽しむなかで 「自分のグループ」という意識をもたせたいと考えた。

#### ①グループづくり

グループ分けは  
すでに全校集会で色  
別4グループが編成  
されていたこともあり  
子どもたちの混  
乱を招かぬよう 同  
じ構成にすることに  
した。このことで同

配 時	1	2	3	4
グループづくり	グループわけ グループ名、リーダー決め			
うた・リズム	は る の ま き ば			
つ くる 活 動	旗 づ く り			
ゲ ー ム 的 括 動	集 ま れ ゲ ー ム			

じメンバーで活動する機会が 週2回の部朝の会に毎週木曜日の全校集会を加えた3回もあることになり 一層グループへの所属意識が育まれやすかったといえる。

全校集会では色だけがグループの手がかりであるが さらに自分のグループがわかりやすいようみんなで相談して 色からイメージした名前をつけることにした。決まったグループ名は「黄色いちょうちょう」「赤いくるま」「白いうさぎ」「青いことり」である。その名前を各リーダーがみんなの前で発表することで自分のグループと共に他グループへの意識ももたせたいと考えた。

グループのリーダーについては子どもに分かりやすく親しみやすい「お父さん」「お母さん」という呼び方とした。高学年の子どもに対して 学部におけるリーダーという意識をもち 役割を果たしてほしいという願いはあるが 自分がリーダーになりたいという子どもの意欲も大切にしたいと考え 高学年ということにはこだわらなかった。このことは グループの自主的 意欲的活動を促す一因となったようである。

#### ②歌「はるのまきば」

歌は 4月初であることを考え 前年度にも取り組んで子どもたちも親しんでいる「はるのまきば」を選び 部朝の会の導入とした。リズムにのって緑のテープをつけたバトンを振る活動は どの子も好きで楽しそうであった。グループ毎に前に出て発表したり 他グループの様子を見たりすることで「グループとしてのまとまった活動」という意識を育てたいと考えた。



みんなでグループの旗づくり

### ③旗づくり

グループのシンボルとして旗を作ることにした。1年生から6年生までの縦割りであることを配慮して 型紙を使ってたんぽでマークを染めるという活動にしたため どの子も無理なく楽しく取り組めた。この旗は 部朝の会で各グループが座る場所にいつも立てることにし その準備や片付けはリーダーが行うよう声かけして促した。

### ④集まれゲーム

新しいグループや旗に早く親しむことができるように 旗を使った「集まれゲーム」を行った。音楽に合わせて自由に歩き 笛の合図でそれぞれ旗のまわりに集まって座るというルールである。旗以外の手がかりとして グループの色の帽子やゼッケンを身に付けると共に 旗のまわりに同じ色のブロックを椅子がわりに置き よりわかりやすいよう配慮した。

なるべく子ども同士で集まることができるよう グループのメンバーを覚えた子どもには とまどっている子を誘って座るよう声かけした。ゲームのあとには 上手にリードできた子を紹介し みんなで拍手してほめるようにした。

いちごがいっぱい (5月)

季節を感じさせるものということで 子どもたちにとって身近で 口にする機会も多いくだもの「いちご」をテーマとして取り上げた。授業では グループ毎に集まって一人が1個ずつ大きないちごを作り それをつなぎ合わせていちご畑にする造形活動と ほんもののいちごを使ったいちごフルーチェづくりを行った。いずれの活動においても新しいグループの友達と協力し合って楽しく取り組むことを主なねらいとした。

#### ①歌「はるのまきば」

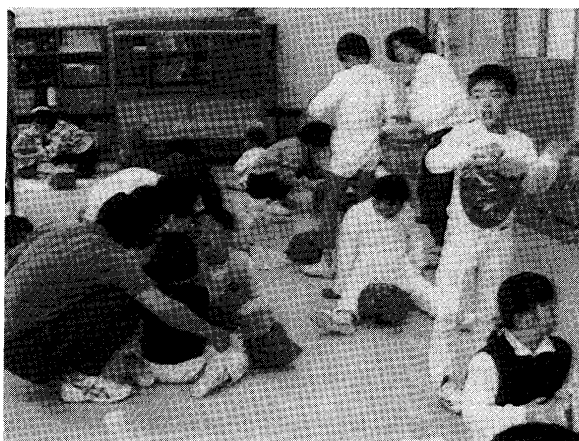
5月中旬で春まっさかりの頃であるため 前時までと同じ歌を続けることにした。バトンの振り方にもいろいろなバリエーションが出てきて どの子も楽しそうな表情で取り組んでいた。

配 時	1	2
うた・リズム	はるのまきば	
つくる活動	大きないちご	いちごフルーチェ

#### ②大きないちご

赤いビニール袋 (30×40cm) に黒マジックで点々とたねを描き その中に新聞紙をまるめて詰めて セロテープで口を止め ヘタを貼りつけるという簡単な作り方にし て どの子も無理なく取り組めるようにした。ヘタはあらかじめ作っておき あとでロープの茎に結びやすいようにモールの柄をつけておいた。

ビニール袋等の材料はグループ毎にまとめて配り 黒マジックは人数分より少なく準備した。グループの友達と新聞紙を分け



大きないちご できたよ

合ったり 用具を友達が使っている時は順番を待ち 交替して使ったりするなど 協力し合う意識を高めたいと考えた。

できあがったいちごは 2グループずつ前に出て基に見立てた長いロープに結びつけることにした。他のグループの作ったいちごに関心を持って見たり 自分のグループの順番が来るまで待ったりすることをねらいとした。いちごがだんだんふえていく様子を見て みんなで作ったいちごを集めるとたくさんになるという喜びも味わわせたいと考えた。このいちごは ホールの壁に飾り季節の雰囲気盛り上げる点でも効果的であった。

### ③いちごフルーチェ

大きないちごを作ったことを踏まえ 今度はほんもののいちごを使ったいちごフルーチェづくりに取り組んだ。いちごのヘタを取って器に入れ そこへ牛乳を混ぜた市販のフルーチェをかけるというものである。導入で 教師がエプロンをして目の前でフルーチェを作り おいしそうに食べてみせることにより 子どもたちの作りたい 食べたい意欲を十分に高めることができた。

作り方の手順は いちごのヘタ取りとフルーチェづくりの二つに分けて説明した。協力して作ることの大切さや楽しさを活動しながら感じてほしいと考え、グループの中で二つに分かれて分担するとスムーズにいくことをアドバイスした。

材料や調理器具をグループに配る際は「お父さん ボールを取りにきて」「お母さん牛乳を持って行って」「お兄さん いちごを取りにきて」というような声かけをしてグループ内の役割を意識させることをねらった。

グループで楽しくフルーチェを味わった後は 片付けも協力して行うよう促した。

### アンサンブル小学部 (6月)

6月始めに「オーケストラ・アンサンブル金沢」の演奏を聴く機会があり 子どもたちはいろいろな楽器の音色に触れ 大きなホールいっぱい響く生の音楽に体全体でリズムをとりながら聴き入って楽しそうであった。その楽しさの余韻の中で 自分たちで簡単な楽器を作り グループで演奏発表をする活動を設定した。グループの友達と身近な素材を使って好きな楽器を作り 音楽に合わせて自由に演奏したり 他グループの演奏を聴いたりして「アンサンブル小学部」の雰囲気を楽しみたいと考えた。

#### ①かえるの音楽隊

導入として かえるの帽子をかぶり 緑の服を着た4人の教師によるかえるの音楽隊が 子どもたちの大好きなミッキーマウスマーチの曲にのって登場し 手作り楽器でにぎやかに演奏してみせた。子どもの代表一人が指揮者としてタクトを振ることで一層楽しい雰囲気を盛り上げることができた。

さらに 毎年この季節に親しんでいる曲「かえるのがっしょう」を歌いながら演奏してみせたり やってみたい子どもに前に出てもらい楽器を演奏させたりすることで 自

配 時	ア ン 演	1	2
うた・リズム	アン サン ブル 金 沢 奏 会	かえるの音楽隊 演 奏 会	
つくる活動		楽 器	

分もしてみたいという意欲を高めていった。

## ②楽器づくり

材料として 牛乳パックや空き缶 卵パックや割り箸等いろいろな素材を子どもたちが家から持ち寄った。それを4グループに配分し 自分の好きなものを選ぶようにした。グループ毎に集まり はさみや接着剤 ビニールテープなどはみんなで仲良く使って作るようにさせた。できあがった楽器を見せ合うことでお互いの楽器への関心を促した。

## ③演奏会

グループによる発表の前に 教師の音楽隊が「かえるのがっしょう」の曲を歌の部分と合奏の部分の区別が分かるように演奏してみせ 子どもたちに演奏の見通しをもたせた。また グループ毎に別々の場所で練習する時間を与え 力を合わせて発表するという気持ちが高まるよう考慮した。

ホールの背景にかえるの掲示をし 子どもたちにはかえるの帽子をかぶせることで発表会の雰囲気盛り上げた。また 他グループの演奏を聴く時には 一緒に歌ったり 拍手したりするよう子どもたちに促すことで共に楽しめるようにした。発表の最後には たくさんの教育実習生の前で全員で合奏し みんなで楽器を演奏する楽しさを味わわせることができた。



ぼくの作った楽器で演奏会

たなばた

(6月～7月)

小学部で毎年恒例の行事である「たなばたまつり」に向けて 子どもたちがイメージしやすい「笹・星」を中心とした活動を行った。たなばたの歌では笹や音色のきれいな楽器を使用し曲に合わせて表現した。飾り付けやクッキー作りに取り組むことを通して「たなばたまつり」への気持ちを高めていった。

配 時	1	2	3	4	5	6	た な ば た ま つ り
うた・リズム	←────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────────						

## ①リズム「たなばた」

たなばたに欠かせないほんものの笹を準備した。子どもたちが振れるくらいの大きさの笹を振るとサラサラと音がするので イメージを体で感じるができると思った。予想通り各グループが前に出て早く振りたいという気持ちがダイレクトに伝わってき

た。また音楽に合わせて笹を振るだけでなく 子どもたちがもっと主体的にかかわれるのではないかと考え またたく星をイメージできる楽器を加えることにした。笹の次の週はトーンチャイムを加えさらに次の週はツリーチャイムと徐々に増やした。笹担当のグループとトーンチャイム・ツリーチャイム担当のグループに分かれて演奏を行った。演奏は2グループで行うこととし 相談する時間をとった。どちらの担当を選択する



ささのは サラサラ

かはグループに任されており教師が最初に「笹をしたいグループ？」と聴くと誰の手も挙がらなかった。これは子どもたちが相談した結果 笹を振るよりも楽器を鳴らしたいという はっきりとした自分たちの気持ちの現れである。

## ②星型クッキーづくり

たなばたまつりの日に、自分たちで作ったクッキー取りゲームをするために 星型クッキーを作ることにした。各グループにテーブル、ボール、麺棒、クッキー生地等の道具や材料が用意された。子どもたちは「生地を延ばす→星型の型で抜く→卵白を塗りトッピングする→焼く」という工程を各グループで協力し 分担して作ることにした。また クッキーが焼けるのを待っている時間に 笹につるす願いごとを一人一人が短冊に書いた。

## ③星取りゲーム

グループの仲間意識を高め 星を意識させるためにゲームを行った。2グループ対抗でホールの片側に待機し 反対側にペープサート板を置いた。それに各グループの色の星を貼り 一人一人が取りに行くリレー形式のゲームである。約束として「取りに行ったら戻ってくる」「次の人にタッチする」「取った星は各グループの旗竿に順番に貼る」の三つとした。また 子どもたちに分かりやすいように 交代するときは「タッチ」と声かけをした。また 取ってきた星はグループの旗竿に貼った両面テープに 上から順番に貼ることで星の置き場所を明確にした。

## ④七夕飾りづくり

大きな笹に飾るために「名前短冊」「吹き流し」「ちょうちん」の三つを作った。まず教師が作って見せることで子どもたちに見通しをもたせ 1時につき 一つの飾りを作った。同じ材料を使い 手順を簡単にすることで一人一人が容易に製作できるように配慮し ちょうちん作りでは 紙を切り離さないように 割り箸で紙をはさむなど工夫した。実際の活動場面では早く作った子どもが他の子に教えている様子も見られた 作品は子どもたちがいつでも見ることができるよう ホールの壁にグループ別に毎回掲示した。飾りがどんどん増えることによって 子どもたちはわくわくして見るようになった。

## ⑤飾り付け

グループが一齐に飾り付けを行えるようにし 自分たちで作ったたなばた飾りを分かりやすくするために 大きな笹をグループの前の壁に1本ずつ用意した。自分の好きな枝にセロハンテープで飾り付けたが その時一カ所に固まらないように声かけをした。

### スイカだいすき (7月)

夏休み間近のこの季節に連想する夏の食べ物の一つとしてスイカがあげられる。スイカは重くて大きいというイメージがあり 子どもたちもよく知っている果物である。歌はスイカにちなんだ「スイカのめいさんち」を取り上げた。この单元では各グループの子どもたちが みんなで作ったスイカを協力して運ぶというゲームを取り入れた。落とすと割れるから「そーっと」運び重いものだから「二人で協力する」ということを大事にした。

#### ①歌「スイカのめいさんち」

「すいかのめいさんち」は同じフレーズが繰り返され 子どもたちには覚えやすいことと そのフレーズでかけ合いすることによって相手の存在に気づき 仲間意識が芽生えると考えこの曲を選択した。

繰り返しのフレーズ「スイカの

めいさんち」のカードを作り それが出た時に 全員で歌うことにした。かけ合いを楽しむために横一列の並び方から黄・赤グループと白・青グループが向かい合うことにした。相手の声と表情がよく分かるようになり より楽しく歌えるようになった。さらに 「スイカのめいさんち」の部分に振り付けを加えることにより 一層歌う楽しさを味わえるようにした。

#### ②スイカづくり

イメージがわきやすいように本物のスイカを見てから 教師が子どもたちの前で作り方を見せ見通しをもたせた。グループで2個ずつのバスケットボールを 協力して緑の透明ビニール袋に入れてセロハンテープでとめた。その上から 自由に細長くちぎった黒い紙を貼ってスイカにした。できあがったスイカを教師がみんなに披露した



スイカ運び そおっと そおっと  
が その模様にはグループの個性が出ていて面白いものとなった。

#### ③スイカ運びゲーム

スイカづくりで作ったスイカを ビニール袋に乗せて運ぶゲームをリレー形式で行うことにした。スイカを乗せるビニールはグループの色と同じにし その四隅に子どもたちが握りやすいように持ち手を付けた。第1時はスイカを2個乗せて二人が協力して運ぶことにした。競争意識が強くて急ぐあまり 落とした場合は「そーっと」と言いなが

らスイカを元に戻させた。落とさずに上手に協力して運べたペアは どころがうまくいったかをみんなの前ではめた。第2時では2グループ合同で10人ずつが対抗して行った。2色をつなげたビニールにスイカを4個乗せて お父さんペア、お母さんペアなど 同じ役割の人がペアになることで もっと協力して運ぶよう競争意識を促した。

このゲームは ペアで協力して運べるようになってきたことで 運動会の「はこべ！大きなかぶ」競技へと発展した。

### ぶどうで染めよう (9月)

毎年9月の上旬に小学部全員でぶどう狩りを行っている。収穫したぶどうの一部を使ってぶどう染めをすることにした。「ぶどう狩りへ行こう」では ぶどうの収穫は丁寧に扱わないと食べられなくなることを話し 片手で房を持ち反対の手のはさみで切ることを学習した。ぶどう染めはいくつかの工程があるが 昨年もぶどう染めをしていることと 食べるとおいしいぶどうを使っているので興味が持続した。歌は毎年秋に歌っている「とんぼのめがね」を取り上げた。

配 時	1	ぶ ど う 狩 り	2	3	4
うた・リズム	とんぼのめがね		とんぼのめがね		
つくる活動			ジュース	染める	糸はずし
ゲーム的活動	ぶどう狩りへ行こう				

#### ①歌「とんぼのめがね」

毎年秋に歌っているなじみの深い歌である。歌詞のイメージに合わせて ほんもののめがねをかけて歌うことにした。サングラス、鼻付きのめがねなどの様々なめがねを用意することでめがねへの興味を広げた。第1時はめがねをかけている子どもと教師が前に出て歌った。第2時は友だちに目を向けさせるために 各グループのお父さんたち、お兄さんたちなどの役割毎に前に出てもらい めがねをかけて歌ってもらう形を取り入れた。第3時からグループ別に前に出て自分で好きなめがねを選択し この歌を歌った。他グループの発表を見ている間に 自分のかけたいめがねを決めた子どもは 自分たちのグループの発表の時に積極的にそれを取りに行く姿が見られた。はじめはかけるのを嫌がった子どもでも 周りの子どもたちがかけているのを見て 自分も我慢してかけることができるようになった。

#### ②ぶどう狩りに行こう

事前学習として 服装の話やぶどうの取り方の練習を行った。ぶどうを取るときにははさみを持った反対の手でぶどうを持たないと 落ちてしまうことをおさえた。その後 子どもの背の高さに設置したひもに自作のぶどうを下げ グループの代表が切り方の練習を行った。ぶどう畑では高いところにもぶどうがあるので 台を使って高いところのぶどうを取る学習も行った。

### ③ぶどう染め

ぶどう染めでは 三つの工程を3時間かけて行い グループ内で協力して活動そのものを楽しめるようにした。

ジュース作りでは ぶどう狩りで収穫したぶどうを1個ずつ房からはずし ジューサーに実を入れジュースを作ることにした。ジュースは1台なので 早く実をはずせたグループから交代で前に出て行った。ジュースを中心に置き周囲から一粒ずつ穴に入れるのだが 大きな音がするために恐がる子がいた。しかし ジュースが溜ってくると恐る恐るながら入れている場面も見られた。できたジュースはグループ毎のペットボトルに入れて量を比べて成果が見えるようにした。

染める活動では 各自がハンカチ大の布一枚を染めた。その一端をつまんで糸を「くるくる」巻き 「ぎゅー」と縛るように常に声かけをした。グループ毎にそれぞれ卓上コンロ、鍋等を使用するので 安全には十分配慮した。子どもたちが一番興味をもったのは鍋にジュースを入れるときである。席を立ちみんなの顔が鍋の周囲に集



まってきた。布を十分水で濡らしてから鍋の中に入れると すぐに染まりだしたが 子どもたちはもっと色を付けようとして 交代しながら箸やしゃもじで鍋の中の布をギュッギュッと押していた。また 蓋を開けたときに湯気が立ち いい匂いがしてきたので 子どもたちはより興味をもって取り組んだ。

糸はずしの活動では 染めて乾かした布なので 縛ったときより固く締まっていたはずしにくいものがあつた。はずしにくいものは教師が一部をはさみやナイフで切りなるべく子どもが指を使ってはずすことができるようにした。その布はグループ毎に壁面に掲示し 自分の染めた布を見て子どもたちは感動していた。

まつりだ ワッショイ！ (10月～11月)

小学部では 毎年秋に親子でさつまいもほりを行っている。この楽しい行事に関連して「おおきなおいも」と題した簡単な音楽劇に取り組むことにした。さらに 実りの秋ということで収穫を感謝する秋まつりを行うことにした。グループで大うちわやみこしを作り それをかついで祭ばやしに合わせて練り歩くという内容である。練り歩きはグループでお互いに発表し合うことにした。グループで協力して作り 発表での役割も分担して みんなでまつりの雰囲気を楽しむことをねらいとした。

配 時	1	い も ほ り	2	3	4	5
う た ・ リ ズ ム	↔ おおきなおいも		↔ おみこし ワッショイ！			
つ く る 活 動	↔ やきいも		↔ みこしづくり			

### ①音楽劇「おおきなおいも」

音楽劇には 昨年に引き続き「おおきなかぶ」をアレンジした「おおきなおいも」を取り上げることにした。この劇はストーリーに繰り返しがあって子どもに分かりやすく登場人物にグループ内の役割(お父さん、お母さん、お兄さん等)をあてはめることができる。自分の役を意識しながらグループの友達と楽しく劇に取り組めることをねらいとした。

導入として教師が一度演じてみせると 子どもたちもとてもしてみたそうであった。次時にグループ毎に前に出て演じてもらうことにして 他グループの劇を見ながら教師と共に歌えるように歌詞カードも準備した。しかし 日程の都合でその機会を失ってしまったことは大変残念であった。

### ②やきいも

いもほりの事前学習として 畑のほんもののさつまいもをプランターに植え直したものを4個準備し 掘り方の練習を行った。各グループから一番年少の子どもが前に出てつるを引っ張り 大きないもがつながって出てくると 子どもたちから「わあ〜っ!」と歓声があがった。

いもほり当日にはやきいももするので 引き続いてやきいもの作り方の学習を行った。手順は さつまいもを新聞紙に包み 水に濡らしたあとアルミホイルで巻くというものである。1グループずつ順番に前に出て行い バーベキューコンロのおこした火の中に入れていった。この練習をしたことで いもほりの日はやきいもの活動に見通しをもって取り組めた子が多かった。

焼きあがったいもは みんなでおいしく味わい 翌日に行ういもほりへの期待を高めた。

### ③みこしづくり

導入として はっぴを着た教師がみこしをかつぎ 笛や太鼓を鳴らしてにぎやかに登場して子どもたちの興味を引き付けた。さらに 自分もやってみたいという子どもにも参加してもらい 一緒に練り歩くことで一層関心を高め 楽しい雰囲気を盛り上げることができた。

そのあとに手作りみこしのいろいろな飾り付けを紹介して 作りたいなあという気持ちを引き出すようにした。一つのみこしを2グループ共同で作ることにし グループ内での協力に加えて 他グループとも力を合わせる経験をさせた。飾りの素材や用具はグループで仲良く使うようにさせた。作る過程では 子どもの得意な面を活かし 意欲や発想を大切にしながらそれぞれに応じた支援を行った。さらに 子ども同士がお互いに協力して取り組めるように促した。たとえば テープを切る、貼る、両面テープの紙をはがす、その上にお花紙を貼りつけていくなど 役割を分担するよう声かけをしたりした。

できあがったみこしを披露し合うことで がんばって作り上げた喜びを味わわせると共に 他グループの作品にも関心をもたせることをねらった。

### ④おみこし ワッショイ!

「おみこし ワッショイ!」と題したグループ発表に向けて まず2グループ毎にだ

れがどんな役（みこしをかつぐ人、うちわを振る人、楽器を鳴らす人等）をするか話し合わせた。自分のしたい役 グループの友達ができそうな役等を話し合いみんなで協力すると楽しい発表ができるということを意識できるようにした。そのあと それぞれ 別の場所で 祭ばやしに合わせた練り歩きを練習させ みんなの前で発表するために 力を合わせてがんばろうという気持ちを高めていった。



おみこし ワッショイ！

発表では自分のグループの色のはっぴを着て まつりらしい雰囲気を高めた。教師も共に楽しみ 見ている子どもたちにも 「ワッショイ！」の声を一緒にかけてもらうことで共に楽しめるよう心がけた。最後には全員でみこしをかつぎ にぎやかに練り歩いてまつりの楽しさを味わった。

### たのしいクリスマス

(11月～12月)

11月下旬となり 1か月後の小学部の「クリスマス子ども会」に向けて その雰囲気を盛り上げていこうということになった。音楽劇や自分たちでラッピングしたプレゼントを使ったゲーム、キャンドルサービスやクリスマスツリーの飾り付け、おいしいケーキづくり等にグループの友達と協力し合って楽しみながら取り組むなかで 12月の恒例行事への期待感を高めていきたいと考えた。

配 時	1	2	3	4	5	6	7	クリスマス子ども会
うた・リズム	<div><div></div><div></div><div></div><div></div><div></div><div></div><div></div></div> <div>あわてんぼうのサンタクロース</div> <div>きよしこのよる</div>							
つくる活動	<div><div></div><div></div><div></div><div></div><div></div><div></div><div></div></div> <div>ラッピング</div> <div>飾り付け</div> <div>ケーキ</div>							
ゲーム的活動	<div><div></div><div></div><div></div><div></div><div></div><div></div><div></div></div> <div>サンタさんのお手伝いゲーム</div>							

#### ①音楽劇「あわてんぼうのサンタクロース」

表現会が終わった直後で それまで各クラスで劇に取り組んできたこともあり クリスマスの導入を簡単な音楽劇とした。題材は この季節にはいつも子どもたちが親しんでいて ストーリーも分かりやすい「あわてんぼうのサンタクロース」にし サンタやトナカイや子どもの役になり いろいろな楽器も使って楽しむことにした。表現会で使った大道具も一部使用し 劇らしさを演出した。また 衣装はもちろん楽器も異なるものにする事で 自分になりたい役を選択する要素に幅を持たせた。

第1時では 教師の劇を見せてストーリーの展開に見通しをもたせたあとに各グループ毎に劇を行った。第2～4時では 各グループから2人ずつ代表が出て 8人で劇を

行い形をとった。なるべくかわるがわるに違う人が出て 一度やった役は避けるという約束にし 劇の前にその子たちで話し合わせるようにした。

## ②ラッピング

クリスマスに欠かせないプレゼントをラッピングする活動に取り組んだ。ラッピングにはいろいろな方法があって 子どもが思い思いに取り組むことができ どのようにしてもそれなりの素敵さが感じられるという良さがある。空き箱や包装紙 リボン等の材料は子どもたちが家から持ってくることにし それぞれの好みを活かしたバラエティに富んだプレゼントづくりをねらった。初めに教師が 箱を袋に入れて口をリボンで結んだり 包装紙に包んだりして いろいろなラッピングの方法があることを見せて 活動の見通しをもたせると共に子どもたちのやりたい意欲を高めた。

できあがったプレゼントには 自分の名前を書いた折紙を飾りのように貼りつけるなど自分のものだとわかるようにし みんなの前で 披露し合って作った喜びを味わった。

## ③「サンタさんのおてつだい」ゲーム

前時に作ったプレゼントを使って「サンタさんのおてつだい」というゲームを楽しむことにした。ルールは コースの途中に置いてあるプレゼントの中から1個取り それを向こうの袋に入れて戻ってくるという簡単なものにした。さらに その袋はサンタやトナカイが持ち 袋の色はグループの色にするという 視覚的にも子どもにとってわかりやすいものとした。また グ



あわてんぼうのサンタとうたおう

グループ対抗のリレー形式で行うことで他グループとの競争意識をもたせることをねらった。帰りのコースには 子どもが大好きなすべり台を設置することで楽しみをふやし ゲームへの意欲を高めた。コースが平坦でないため時間がかかり勝敗の行方もそこで左右されることが多いので 見ている子どもたちの応援にも熱が入り 盛り上がった。

## ④リズム「きよしこのよる」

前半のにぎやかで楽しい「あわてんぼうのサンタクロース」に代えて 第5～6時はクリスマスのおごそかな雰囲気味わわせたいと考え 静かな「きよしこのよる」の曲を取り入れた。導入では 蝶ネクタイやロングスカートで盛装した教師の聖歌隊が登場し ピアノの伴奏に合わせてハンドベルによる和音の演奏を披露し 子どもの興味 関心を引きつけた。

その後 グループ毎に前に出て演奏することにしたが その順番は「したい人？」の教師の声に 素早くたくさん手が挙がった意欲的なグループからとした。力を合わせて演奏すれば みんなからたくさん拍手がもらえるという発表形式にすることで 子どもたちの認められたい気持ちを満足させた。

静かな雰囲気ができたところで 第5時にはキャンドルサービスを行った。グループ毎に一人ずつ火をともしたキャンドルを持ち 「きよしこのよる」の曲に合わせてしず

しずと歩いてホールを一周し 次のグループにキャンドルをそっと手渡すという活動である。グループのお父さんを先頭に お母さん お兄さんというように一列になって歩くことでグループ内の役割の自覚を促し まとまって活動する意識を高めたいと考えた。

#### ⑤飾り付け

「クリスマス子ども会」の会場であるホールをみんなで美しく飾ることにし まずクリスマスツリーの飾り付けに取り組んだ。導入で 教師がツリーをみんなの前で組み立て そこへ飾りをいくつかつり下げてみせて 子どもたちの意欲を高めていった。一人1個ずつという約束で グループ毎に順番に前に出て 箱の中から自分の好きな飾りを選び 思い思いの枝につり下げていった。この場面では お父さんが同じグループの1年生の子に 「これは？」と言いながら飾りを選んであげているやさしい姿も見られた。最後に教師が豆球のスイッチを入れ 色とりどりの光がつくと 子どもたちから「わあ〜っ きれい！」と歓声があがった。その前で「きよしこのよる」のハンドベルの演奏を行って さらに雰囲気盛り上げた。

ホールの飾り付けのためには 1組の子どもたちが紙やモールで作った飾りと スプレー式のスノーパウダーと型紙を準備した。飾りは わかりやすいように各グループの色の袋に入れて お父さん役の子に配り スノーパウダーは2グループに1個ということで順番に使うよう促した。グループで力を合わせ 楽しく飾り付けに取り組むと共ににぎやかに飾られたホールで「クリスマス子ども会」を行うという期待を高めていくことをねらいとした。

#### ⑥ケーキづくり

「クリスマス子ども会」が近づき みんなでケーキ作りに取り組んだ。最後の活動として 子どもたちの関心が強い「食べ物」を取り上げることにしたのである。市販のスポンジケーキに生クリームをぬり その上に絞りだし袋を使って生クリームで模様をつけ フルーツで飾り付けるという手順である。生クリームはあらかじめ泡立てておき 導入として教師が作り方を説明するときに みんなの前でもう一度ハンドミキサーで泡立てる様子を見せた。

ケーキの材料や調理用具は 各グループのお父さんやお母さん等を教師が指名して前に取りにくるようさせた。エプロンで身支度をさせ 手を汚したり 指をなめたりしないよう衛生に留意させると共に 作る過程では 順番に協力して取り組むよう促した。

できあがったケーキは 教師が一つずつみんなの前で「おいしそうね」「きれいにできたね」と披露したあと グループで切り分けておいしく味わった。やかんのお茶をお母さんが自主的にみんなのコップに入れてあげるというほほえましい様子も見られた。

後片付けも協力して行うよう声かけをした。

(島 清 徳 神 谷 みつ江)

#### (4) 実践例

##### クラスを越えたつながりを育んだ 赤いくるまグループ

赤グループは年度当初 勝手な行動が多く 互いに相手をほとんど意識しておらず まとまりに欠ける感があったが 活動を重ねていくうちに相手を意識するようになり さらには部朝の会の時間を越えたかかわりも芽生えてきた。

#### ① 個性豊かなメンバー

赤グループはある程度人とかかわりがもてるダウン氏症候群の3名(1年のA子 4年のC子 5年のD男)と教師とかかわりが中心の2名(2年のB男 6年のE男)の5名で構成されている。一人一人は活動に対して意欲的な面もあり かかわりももてるのだが 相手の立場やまわりの状況に合わせて活動するということが少なく 自分の興味・関心のおもむくままに振るまうことが多かった。

#### ② 赤グループの子どもたちにとっての部朝の会

部朝の会が始まった当初 メインの教師が活動についての話をしている場面で次のような様子が見られた。

A子…1年生ということで何をしたいかわからず E男のまねをしてハンカチを(1年)  
ふったり C子のまねをして立ち歩いたりしている

B男…大好きな「いっぽんばし」という手あそびを後にいる赤グループの教師にして(2年)  
ほしいとせがんでいる

C子…立って子どもたちの方を向き 手あそびを見せたい。本人は手あそびの指導(4年)  
者になったつもりらしい

D男…後にいる赤グループの教師に家族のことや家での出来事などを一方的に話しか(5年)  
けている

E男…ハンカチの感触が好きで ハンカチをふるという常同行動にふけっている(6年)

このように赤グループの5名は部朝の会でそれぞれが自己主張し まったくまとまりがなかった。またリーダーであるお父さん お母さん役を決める際 D男 C子は立候補するという意欲を見せたが リーダーの役割については ままごとあそびの延長として引きうけているので 課題に沿わないかかわりも多く見られた。



自己主張する子どもたち

#### ③ 楽しく活動に取り組むことをめざして

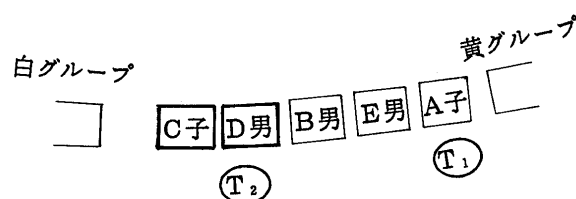
このような赤グループの様子を踏まえ このグループがまとまって部朝の会に取り組め

るようになることをねらって 「話を聞き 楽しく活動に取り組む」というグループ目標をたてた。話を聞くということは活動に取り組む上で最も大切なことであり このグループの一番の課題であると考えたからである。

またどの子もある程度人とかかわりがもてるにもかかわらず グループとしてはバラバラな状態であったため みんなで楽しく活動してほしいという思いからこの目標を設定した。

### 〈第1期 話を聞いて活動しよう〉

赤グループの子どもたちが話を聞けるようになるにはどうしたらいいだろう。赤グループはどの子も一方的なかかわりが強かったり、特定の子同士がふざけあったりという面をもっていた。そこで座る場所のもつ意味が大きいのと考え、それまで自由に座っていた席を決まった座席にすることにした。加えて担当の教師の位置も大事であったので教師の位置も決めた（図Ⅱ－2参照）。もちろん子どもたちが話に集中できるよう声かけも行った。



図Ⅱ－2

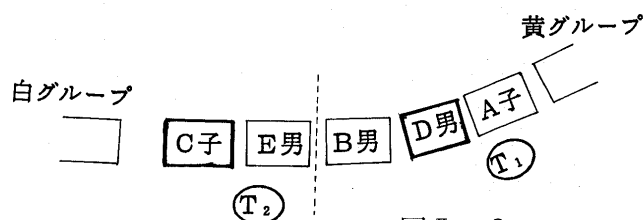
#### 座席決定のポイント

- A子はC子のまねばかりしていたので席を遠ざける
- C子はB男E男にちょっかいを出すのではなす
- C子とD男は昨年同じクラスで対等に近い関係なのでとなり同士にする
- T<sub>1</sub>T<sub>2</sub>は教師

座席を替えたことでだんだんとC子とD男が赤グループの他のメンバーに気をうばわれなくなり、メインの教師の話に耳を傾けるようになった。それと同時に他の三人にとっても落ちついて話を聞ける状況が生まれた。その結果グループ全体で活動に取り組むことができるようになってきた。しかし同じ活動をしているだけでグループ内でのかかわりが生じたというまでには至っていなかった。C子やD男に「A子連れてきて」と声かけしても自分のことで精一杯でグループの他のメンバーにまで気がまわっていなかった。相変わらずC子とD男はリーダーとしての自覚をもっていなかったのである。

### 〈第2期 お互いを意識してみんなで活動しよう〉

グループとしてより楽しく活動するためには一人一人がただ活動するだけでなく お互いを意識することが大切であると考えた。同時にC子 D男にリーダーとしての自覚を身につけてほしいと考えた。そこで赤グループの5名をより密接にかかわることのできる小グループに分けることにした。相性などを考慮してD男を含んだ3名とC子を含んだ2名に分けた。さらに座席もその友達が意識しやすいよう再度変更した（図Ⅱ－3参照）。またその小グループのメンバーを意識することができるようD男には「お父さん A子とB男連れてきて」C子には「お母さん E男連れてきてね」などと常に声かけした。



図Ⅱ－3

#### 2つの小グループ

- 1 C子とE男
- 2 D男とB男とA子

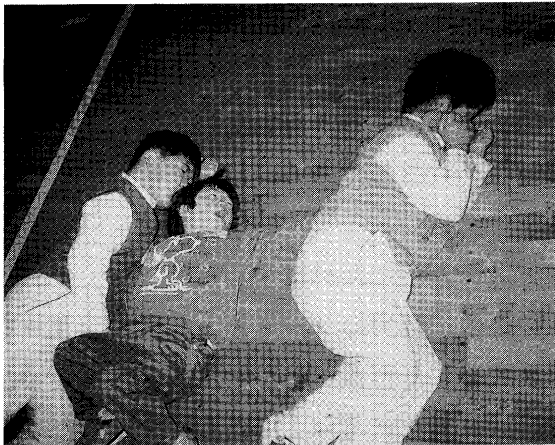
このような手だてをとったことにより 部朝の会のはじまる前に席につかないB男をD男が連れてきたり 『すいかづくり』の活動でD男がA子と協力してセロテープを貼ったりするなどの様子が見られた。このようにお互いを意識しながら一緒に活動に取り組めるようになってきたのである。またD男は体が小さい1年生のA子に対してかわいいという気持ちをもつようになり 頭をなでたり 名前を呼んだりして自分からかかわっていくようになっていった。

#### ④ かかわりがどんどん深まって

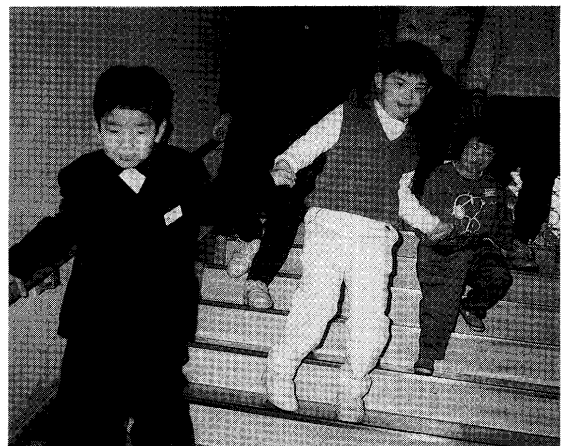
部朝の会が基盤となってD男とA子の関係はさらにひろがり 他の場面でも見られるようになった。今まで自分の教室にいることが多く 他のクラスの子を意識していなかったD男 A子がお互いのクラスによく顔を出すようになった。D男はA子のクラスに行き担任に「A子は？」とたずねることもしばしばあった。またある朝玄関でD男はA子が登校してくるのを待ち ズックを替えさせて教室まで手をつないで行き担任に「先生 A子来たよ」と告げた。このようにA子はD男を慕い D男はA子をかawaiiがるようになり かかわりがどんどん深まってきた。また全校集会のゲームでB男とD男 A子とC子が手をつないで走っている姿も見られた。C子は友達と手をつないで走ることはあまりなく 自分中心に教師の手を引っぱって走ることが多い。しかしその日はA子と手をつなぎ 走っている途中A子のズックが脱げてもズックをはくまで待つてあげるやさしさを見せた。

このようにグループの中でお互いが意識するようになり C子 D男が相手に合わせてかかわることができるようになり 赤グループは「話を聞いて楽しく活動に取り組む」という目標に近づきつつある。

(吉 谷 明)



全校集会でいっしょにリトミックするA子  
C子 D男



全校集会からいっしょに帰るA子 B男 C男

### ① 動かなくなるリーダーに左右される白グループ

白グループはF子（6年） G男（5年） H男（4年） I子（3年） J男（2年）の5名と教師3名（男1 女2）からなっている。グループの役割は相談して お父さん役をH男 お母さん役をF子とした。

一学期当初の白グループの子どもたちの様子は F子とG男が同じクラスのためF子がG男をやや強引に引っ張っていく形でのかわりがあったが それ以外の児童はお互いにあまりかわり合いがなく 各々が勝手に活動をしていた。（図Ⅱ－4参照） またグループ全体としては注意力が散漫であり 教師の話に集中できず活動内容を把握できないまま授業に参加していた。そのため白グループ全体がバラバラな感じがしていた。また 白グループの特徴として特にあげられるのがダウン氏症候群であるF子のその日の状態によってグループ全体が左右されるということである。F子は 部朝の会の当日の登校後に自分のしたい遊びができなかったり 部朝の会の活動でも自信がなかったりしたときに誰



動かなくなるF子

が何と言おうとも下を向いたまま身動き一つせず 断固として動かなくなるのである。そのことが原因でグループ全体が活動に参加できないことが多く 他の児童にもマイナスの影響を与えていた。しかし F子にやる気があるときには グループ全体が盛り上がり良い雰囲気ですべての児童が授業に参加できた。

### ② F子をリーダーとして育てるために

教師側の意識としては F子をリーダーと考え リーダーを中心としたグループ作りを心がけた。F子は その気になればグループを盛り上げることができ グループへの影響力も大きい。そして グループの中で一番仲間とのかかわり合いがとれそうな児童でもある。F子をリーダーとして育て F子がグループ員を引っ張り グループ内のかかわり合いを深めさせていきたいと考えたのである。そのために次の2点を試みた。

- ・事前の言葉かけによって情緒の安定をはかる
- ・I子とペアを組むことによって仲間意識を育み上級生としての責任感を育てる

### ③ 言葉かけによって変わってきたF子

F子への言葉かけは 白グループにいる学級担任が主となり部朝の会の前日から当日に渡って行った。具体的な言葉かけの内容は「明日 部朝の会があるね。F子 白組のお母さんやしがんばってね」「今日はいちごのフルーチェづくりがあるんだって F子お母さんだから一番につくってもらおうかな。たのむよ」などであり 部朝の会への意識づけを

させ本人に見通しをもたせるようにした。

はじめのうちは 言葉かけに頷いたり返事はするものの 実際の活動になると自信がないのか動かなくなってしまうことも多かった。とくに朝の着替えのときに時間がかかり十分に遊べなかった日に多かった。そこで 朝の着替えの時にも言葉かけし、スムーズに着替えができるように促した。毎日言葉かけを続けるうちに着替えがスムーズにいくようになり 部朝の会直前に動かなくなることが減ってきた。

また 部朝の会の最中でも白グループの教師からの言葉かけを増やし『アンサンブル小学部』の演奏では 「お母さんから順番に遊ぼうね」と言葉かけをしてからF子の演奏したい楽器を選ばせるなど 発表への自信を持たせるようにした。これらの手だてによって見通しや自信が持てるようになったのか徐々に心の準備ができるようになり 授業中に動かなくなる回数が減ってきた。また 白グループの教師に向かって「私 がんばるよ」と言うようになり 2学期に入ってから は 一回も動かなくなることにはなかった。それに伴い 他の子どもへのマイナスの影響も減り 白グループ全体も以前より落ち着いて活動に参加できるようになってきた。

#### ④ I子とのかかわり合いによって

また F子とI子のかかわり合いを持たせるために座席を隣同士にした。すいか運びゲームではこの二人のペアですいかを運ばせ F子がリードすることができた。『まつりだワッショイ!』では二人がうちわ作りの担当になり F子が祭の文字を書き I子が折紙を切って模様を貼り付けるといった共同作業の姿も見られた。さらに「I子ちゃんが走っていったら連れて来てね。」「お母さんやしI子ちゃんの面倒見てあげてね頼むよ。」などの言葉かけをすることでお母さん役の自覚を促し I子に対して責任感を持たせるようにした。はじめのうちはI子が走っていても知らん顔をしていたが 何回か言葉かけをするうちに連れてくるようになってきた。2学期に入ってから は 言葉かけがなくても進んで連れに行く姿も見られた。

今までは同じクラスのG男としかかわり合いがなかったが このことによって新しい関係ができ 部朝の会以外でもI子の面倒を見に行くようにまでなった。G男に対してはかなり強引にかかわり合いを持っていたのが新しい関係をつくったことによって強引さが薄れ G男自身も以前よりも伸び伸びと活動に参加するようになった。また

I子の方でも上級生とのかかわり合いができたことで 今まで行かなかった上級生のクラスにも遊びに行くようになり 行動範囲が広がった。

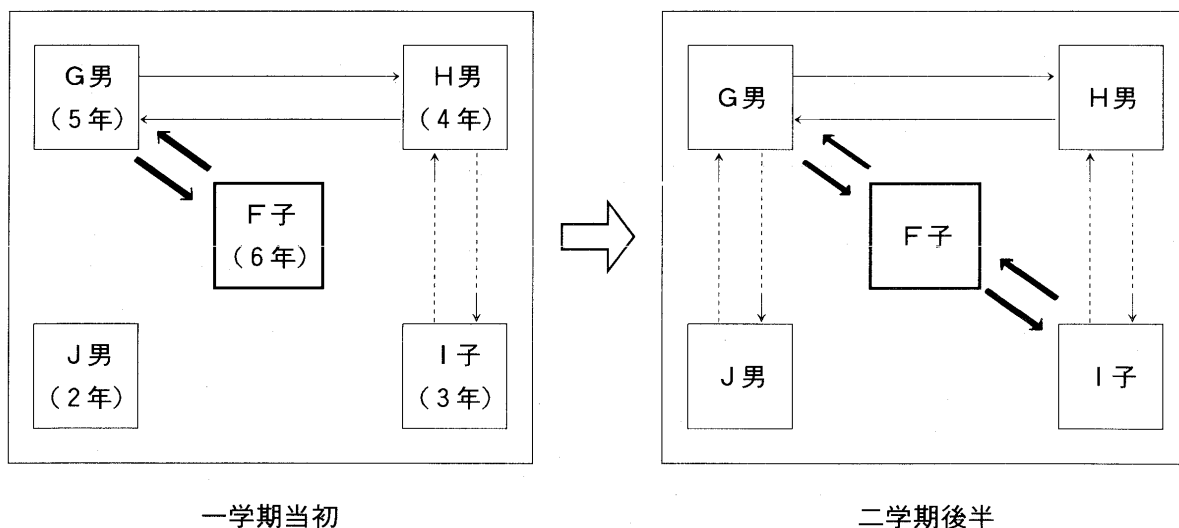


一緒にうちわづくり

### ⑤ F子の変化によって変わってきた白グループ

このようにF子自身が動かなくなることが無くなり成長したことで グループのメンバーに与える影響がマイナスからプラスへと変化してきた。リーダーとしてはグループ全体を引っ張る力は足りないが かかわり合いの面からは I子との新しい関係をつくったことやG男との関係がスムーズになったことなどから より豊かなかかわり合いになってきたといえるだろう。今後 他の子どもともかかわり合う機会を増やし F子を通してながらも白グループ全員が仲間として意識できるようになってほしいと願っている。

さらに 白グループ全体では「何でも一番になろう」という目標を立てており 他のグループよりも早く全員が座ること リズム的活動の発表などではいち早く全員が姿勢を正して指名してもらうことなどで取り組んだ。以前は一度も一番に発表することができなかったが F子の動きがよくなったことで教師の話に集中するようになってきた。そのため全員が一番になろうという意識が強まって一番に発表できることも多くなり 活動への意欲も高まってきた。このグループ目標とF子の成長との相乗関係からグループとしてまとまりつつある。



※F子とG男 I子とH男はそれぞれ今年度同じクラスである

※G男とH男は昨年度同じクラスである

-----> ややかかわり合いがある  
 ———> かかわり合いがある  
 ———> 強いかわり合いがある

図Ⅱ-4 白グループ関係図

(浜 谷 智 子)

① かかわりの芽を持ちつつも バラバラになりがちなちょうちょうグループ

黄色グループは 1～5年生まで各1名 担当教師2名で構成されている。リーダーのK男・L子を中心に比較的まとまったグループである。とはいっても はじめからまとまっていたわけではなく K男・L子のリーダー意識が芽生えてきたことと 他の三人の子らが 今何をしていていいのかが 少しずつ分かってきたことが 絡み合っているものである。

そこで リーダーであるお父さん（K男）お母さん（L子）とのかかわりでM男・N男・O男を見てみると

M男（1年）はじめてのことが多いため 活動に慣れずすぐに泣き出す。担任や学級の特定の友達とは 簡単なコミュニケーションを取ることができる。K男やL子に関心はないが かかわりながら活動することの楽しさを知っている。

N男（2年）食べ物・折紙など興味のある活動には身を乗り出して参加するが 少しでも興味が薄れると 外へ抜け出すなどその場を離れる。体格がよく体力もあるので K男やL子の手には負えないことが多い。

O男（4年）グループの中では「お兄さん」になっているが じっと指示を待っていることが多い。K男やL子とは一学年違いなので どちらとも顔なじみであり 多少のかかわりがある。しかし かかわりの手段としての言葉や身ぶりが うまく使えないので一方的になり 孤立しがちである。

このように それぞれかかわりの素地はあるものの 一人一人がバラバラになりがちな黄色グループであった。

ここでは グループのお父さんになったK男と お母さんになったL子にスポットを当て 二人がどのようにしてリーダーシップをとるようになっていったのか また この二人とのかかわりで 他の子らがどのようにして 意欲的に活動に参加できるようになっていったかを みてみたい。

② K男・L子がリーダーとして活躍できるように

K男とL子をリーダーという点からみてみると

K男（3年）「お父さん」という意識はしっかり持っており 役割を果たしたいという意欲はある。しかし 手足に少しマヒがあり 体が小さい。このことがリーダーシップをとるのに マイナス要因となっている。

L子（5年）しっかりお話を聞くことができ 何をしたら良いのか分かる。グループの最上級生であり リーダーシップを取ってほしいのであるが 構音がはっきりせず 言いたいことがみんなに伝わらない。本人もそれを自覚していて 新しい環境の中では引っ込み思案になる。

このように 二人とも積極的で意欲はあるが リーダーとなるには不十分な点もある。

そこで 二人の持っている良いところを生かし リーダーとして活躍できるように どのような配慮や手だてが必要であるかを考えた。

- ・授業の中では進んで「はい」といって手を上げ 積極的に活動に参加するので その部分で リーダー性を発揮させる。
- ・「つくる活動」では、自分のことをするのに精一杯で 周囲を見る余裕がないので「うた・リズム」や「ゲーム的活動」で みんなの手本となってもらう。特に踊りの上手なL子にはその場をたくさん提供する。
- ・活動の周辺部分で 互いにかかわれる範囲にある 特定の友達（K男はM男 L子はO男）の世話をしてもらおう。
- ・人とかかわって リーダーシップをとることは なかなか難しいこともあるので 「ものを運ぶ」「片付ける」というような ものとかかわりの中でできることを お父さんや お母さんの仕事と決める。できた時には必ず認める。
- ・お父さん お母さんとして何をしたら良いか 分かるような手だてをとる。たとえば 毎回 同じ声かけをして黄色いちょうちょうの旗の出し入れを お父さん（K男）の仕事とする など。

### ③ 「ぼく お父さん」と誇りをもっていえるようになったK男

——— 相談 ———

K男（3年）は ごっこあそびが好きであるから 「お父さん」という役割はすぐに分かったようである。お父さんとお母さんを決める話し合いの時には 進んで立候補した。教師から指名されるのではなく グループ全員の相談の時間をもったことで「お父さん」の意識は高まり 役割を果たそうという意欲も出たようである。

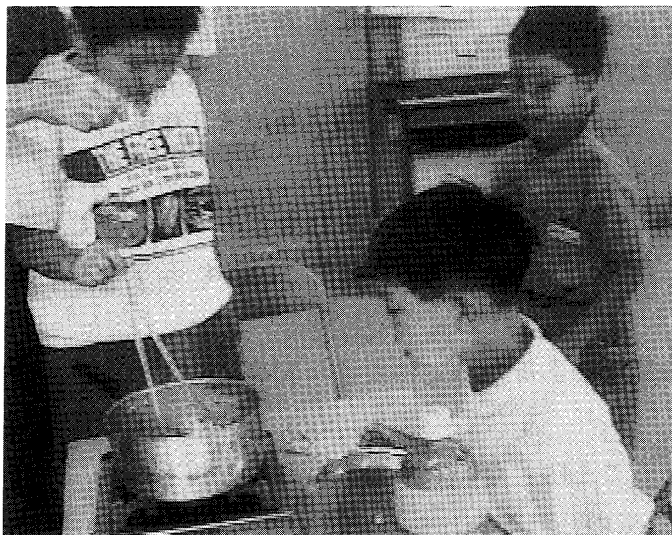
——— 気持ちはあるが手に負えないN男とのかかわり ———

K男は 意欲はあっても なかなか動きがついていかない。N男が席をたって 廊下の方へ走り去るのを見つけた時 「Nちゃん 行ったよ」と知らせてくれる。そこで「お父さん 連れてきて」というと「はい」とお父さんの自覚のもと 意気揚々として追いかけるのであるが しばらくして「来ないもん」と戻ってきたりした。K男の力では 体力のあるN男を連れ戻すことができないのである。これでは「お父さん」の意欲が薄れてしまう。そこで K男には 当面1年生のM男にかかわってもらおうこととし 座席も隣にした。

二人の接点が見られるようになったのは 後にN男が落ち着いてきてからである。

——— M男とのかかわりで自信をつけたK男 ———

M男は未経験なことが多く 新しいことには抵抗を示す。一学期の活動では 『集まれゲーム』でゼッケンを身につけることや 『いちごフルーチェづくり』でボールの中のフルーチェを かき回すことがいやで泣いていた。こんなM男の隣に座ったK男は 「こっちだよ」「座っているの」などと よく声をかけていた。M男もこの程度の言葉ならば 理解できるので K男の言葉かけに合わせて動くことができた。二学期になって M男は「ぶどう染め」の活動で ぶどうをジュースに入れることや鍋の中へ布を入れて かき回すことに 抵抗しながらも泣かなくなった。みんなの輪の中から離れているが時々近



—ぶどう染め— ぼくもやってみようかな

寄って「あ〜あ〜」と声を出して見ている。そして怖いけれども「あっ!」と自分でしてみる。満足そうなM男の笑顔の後ろには「つぎ M男ちゃん」と声かけるK男の姿があった。

このように 自分のことばかけでわかり合え動いてもらえるというM男のかかわりはK男にとって自信につながったようである。

—— グループの旗はこびは

お父さんの仕事 ——

M男は 「お父さんは旗を出して」  
のことばかけで グループの旗の出

し入れの仕事をしていた。声かけがなくても 進んですることができるようになったのは比較的早い時期である。偉いのは このお父さんの仕事が 継続していることである。左手に自分の座る椅子 右手には旗をしっかりと抱きかかえ 「ぼく お父さん」と誇らしげであった。

—— K男のお父さんぶり ——

『楽器づくり』の場面では 声かけがないのにコップをM・N・O男に 進んで分けていた。また 『みこしづくり』では M男と二人ペアになって フェルトペンを使いながら おみこしに模様を描いていた。K男が大きく丸を描きM男がそれをまねている。二人とも無言であるだけに かかわりの深さを感じた。そして『おみこしワッショイ!』の活動では小さな体で 大きなみこしの先頭をかついでいた。このようにいろいろな場面でより積極的に活躍してくれるようになった。



—おみこしづくり— 二人でぐるぐる

#### ④ お父さんのできないことを 助けることで かかわりを広げている L子

L子は 言語を使って友達と関わることは 苦手であるが ものを取りに行く みんなに分ける 集める など体を動かすことは 大好きである。また 自分の得意とする踊りやリズム打ちでは みんなの手本となることに 喜びを見いだしている。

K男の言葉を使っただのかかわりに対して L子は素早い動きを得意とし そのことでリーダーシップをとっている。K男とL子の関係は対照的で 互いのできない部分を 補いつつ グループを引っ張っているようである。

L子は 自分の言葉が 相手に通じにくいことを意識しており 誰とでもかかわろうと

しない。かかわりの相手は 学級内のよくうちとけた友達か 自分のことを知っている教師に限られることが多い。一度 話して伝わらないと思うと 得意のポーズでその場を逃れようとする。

そんなL子に対し 異年齢のM男やN男のいるグループのお母さんになることは 学級内の限られたかかわりから もう一步広げる機会となっている。例えば『集まれゲーム』の時 リーダーであるK男とL子は素早く自分の席に座り 後の三人は全く眼中になく置き去りであった。教師に「M男ちゃん N男ちゃん O男ちゃん 連れておいでー」と声をかけられて「あ、そうか」と自分のグループのN男を連れに走ったのは 運動神



Nくん こっち こっち

経のいいL子である。K男は「早く！早く！」と座ったままの声援である。ここにK男とL子の互いに補い合っのリーダーぶりが伺える。しかも、連れてきた相手は手をつなぐのもいやであった他学級のN男である。『おみこしづくり』でも N男と向き合っ仲よく花を作る場面が見られた。

このように よく知らないN男とのつながりを始め できあがった楽器や飾りを他のグループの友達に見せに行くなど かかわりに幅が見られるようになった。

#### ⑤ リーダーを中心にしてのかかわり合いが育つことで グループのまとまりが

M男は お父さん役のK男を意識するようになり 泣いたり「いやいや」といって 活動に参加しないことは ほとんど見られなくなった。みんなと一緒にしようとする気持ちが 出てきている。N男は 自分が黄色グループだという 所属意識が出てきて グループの近くに 椅子を持ってくるので 集まるのに時間がかからなくなってきた。また 授業中に外へ飛び出すことがなくなり 体揺すりの常同行動も 減ってきている。何よりもリーダーのK男やL子の様子を よく見るようになってきている。O男は 声かけがないと 動けない面があるが おみこしの飾り付けで セロテープを貼るなど簡単な繰り返しの作業はこつこつできるようになってきている。

『まつりだ ワッショイ！』では どの子も嬉しそうで その雰囲気を楽しんでいた。お父さん お母さんの二人のリーダーが 他のメンバーとかかわりを持ち 役割をこなすようになったことで 全体としてグループのまとまりがでてきたようである。

(浦 田 節 子)

① 物を作る作業が得意な五人組

青グループは 5 名の子どもと担当教師 3 名で構成されている。グループ全体として見ると 教師の指示が通りやすく 課題をそつなくこなす印象を受ける。特に 物をつくる作業が得意で 他グループに比べ圧倒的に早く仕上げることができる。しかし 人とのかわりの面について一人一人見てみると

P 男（6 年）自らかかわりを求めていくことはほとんどない

Q 男（5 年）青グループのメンバーには無関心で 他グループの特定の友だちばかり気にして近づいていく

R 子（3 年）教師や気のあった友だちとは積極的にかかわるが グループのメンバーにはまだ慣れておらず 進んでかかわろうとはしない

S 男（3 年）教師とかかわることはできるが 友だちとは難しい

T 子（1 年）入学したばかりで 担任の教師とラポートがとれたところである  
といった具合で グループ内での子ども同士のかわりはほとんど見られない。

② 「グループの仲間を意識しよう」

物に対しては積極的にかかわるが一人一人はバラバラであるという実態から なんとかグループとしてのまとまりをもてるようになってほしいと考えた。そこで 青グループ全体の目標として「グループの仲間を意識する」ことをあげた。意識することがかわりの第一歩であると考えたからである。

また 次のような個人目標も併せて設定し それぞれの子どもがどのような形でグループの仲間を意識したらよいかの指針とした。

P 男（お父さん）教師の指示をきいてリーダーの仕事を遂行する

Q 男 青グループの一員としてみんなと一緒に行動する

R 子（お母さん）リーダーとして T 子の世話をする

S 男 グループでの活動に参加する

T 子 グループの友だちの名前を覚える

③ みんなで机を囲んで作ろう

お互いについて全く無関心な者同士が意識し合えるようになるには どうしたらよいのだろう。物づくりが得意なメンバーなので この長所をできるだけ活かしたい。しかし楽器作りや七夕飾り作りの時のように それぞれが一斉に自分の作品を作る場合は 製作に熱中しすぎて 友だちの様子を見渡さないうちに仕上げてしまう。

そこで 青グループにとっては みんなで机を囲んで一つの物を作る作業が有効であると思われる。数少ない用具を交替しながら使い お互いの作業を見合う。そんな活動を重ねるうちに自然とグループのメンバーに目が向き始めるのではないか。グループのメンバーを意識せずにはいられない場面設定として 机を囲む作業を行うことにした。

また 教師の意図的な声かけによっても 意識づけを行った。事あるごとに「お父さん～してね」と声をかけることによって P男本人はお父さんとしての自覚を持つことは難しくても 他のメンバーがP男をお父さんと意識することを願った。R子には「お母さん T子ちゃんを呼んできて」とT子に注意を向け リーダーとしての自覚をもたせていった。その他 「～ちゃん 頑張れー」と教師が声をそろえて応援したり「～ちゃん上手だね」などと呼びかけたりすることで 少しでもグループの仲間を意識させるよう努めた。

#### ④ 鍋を囲む五人組

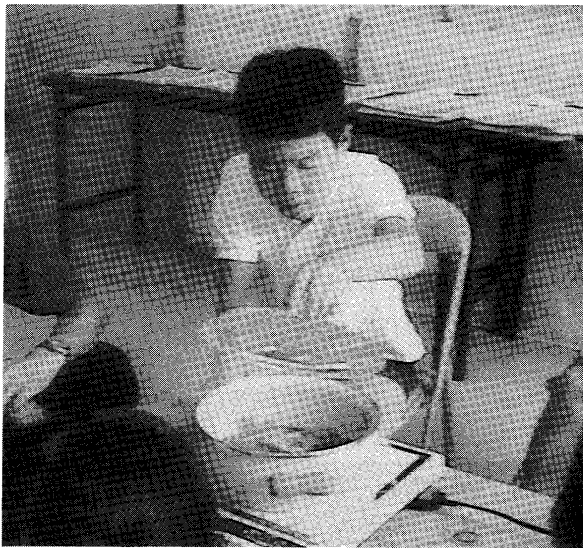
4月に行った『旗づくり』では絵の具を含ませた たんぽを交替しながら使うという方法であったが 他のメンバーが型ぬきする様子をじっくり見るというより とにかく自分がしたいという気持ちが先に立っていた。ただ 小鳥の羽にポスカで模様をつけたときだけは まず上手に描けそうなQ男やR子にしてもらったところ 二人がきれいに波線を描いたのを見て 他の三人もそれをまねるように線を描くことができた。



5月の『いちごフルーチェづくり』では調理の得意なQ男に活躍してもらい 「Q男 クッキーづくり「そおっとのぼしてね」くん すごいね」とみんなで認め合いたいと考えていた。しかし いちごのヘタをとる係とフルーチェを作る係が並行して作業を行っているうちに Q男があっという間にフルーチェを作ってしまう その鮮やかな手つきをみんなで見る機会を逃してしまった。

変化が現れ始めたのは 7月の『星型クッキーづくり』の頃からである。R子がめん棒でタネをのぼしたとき 打ち粉が足りず棒に絡まったのを見てみんながため息をついた。そのくらい みんなが一人の作業に見入っていたのだ。グループに1本しかめん棒がなかったこともよかったのであろう。調理の得意なQ男が思わず手を貸そうとした姿も見られた。星型に抜く作業は 自分でするのはもちろん他の人がしているのを見るのもおもしろかったようだ。ここでは 比較的手先の器用なP男 S男も活躍でき R子は「上手ね」と言って見ていた。この日は「はい 次は～ちゃんの番ね」と教師が中心となって進めてしまったが お互いを意識しながら作業をじっくり見合うことができ ほんの短い間だがグループがまとまった感があった。

こうして 9月に入り『ぶどう染め』の時には 教師が少し離れて見えても5人で鍋を囲んでいた。教師が促さなくても 時々お父さんのP男が蓋を開け 他の4人が鍋をのぞきこむという 何ともほのぼのしたかわりも見られるようになったのである。



ぶどう染め「染まったかな」

#### ⑤ 更なるかかわり合いを期待して

4月当初は一人一人が互いにかかわり合いが持てず 同じグループといいながらも隣に座っているだけという関係であった。物とのかかわりが持てるという側面を生かして共同製作をすることで 各自が互いにかかわり合いを育てていくことをめざした。その際みんなで机を囲んで一つの物を作るという活動形態をとった。また 教師の子どもへの意図的な声かけにも留意した。そのことで 少しずつ友だちを意識できるようになり ゲームの時にもR子がT子に声援を送ったりするなど以前より友だちのことが見えるようになってきている。今後 各自の更なるかかわり合いが育つことを期待している。

12月の『クリスマスケーキづくり』ではグループごとに一つのケーキに飾り付けをした。生クリームをスポンジケーキに塗る活動ではみんなが一人の作業に見入っていた。教師の「次はお父さんのP男ちゃん」の声かけで順番を待つという姿勢が定着してきた。フルーツをのせる活動でも教師の「S男ちゃんはみかんですよ」などの声かけで各自が自分の作業の範囲を守り 次の友だちへ作業を引き継ぐ姿勢が見られた。これらは物を介して友だちを意識できるようになったことのあらわれと捉えることができる。



ケーキづくり「おいしそう!」

(堀 井 和 子)

### 3. まとめ

今年度は「豊かな心と生活をめざして」のテーマのもと小学部では「部朝の会の活動を通して 子ども同士の豊かなかかわり合いを育てるための指導の在り方」を目的として実践を重ねてきた。

ここでは今年度の小学部の研究を(1) 実践のまとめ (2) 「かかわり合いを育てる」視点から見つめた「部朝の会」という形でまとめる。

#### (1) 実践のまとめ

①子ども同士のかかわり合いの様子を観察、分析することで「部朝の会」の活動内容や方法や指導法の妥当性を検証した。

- ・「うた・リズム」「つくる活動」「ゲーム的活動」の中に協力する場面や相手を意識する場面を意図的に盛り込むことで 子ども同士がかかわり合いを育てるために有効な活動になった。
- ・上記の活動の中で 4つのグループが競い合い 見せ合い 共同することを通して 活動に対する意欲・関心・態度などが育った。

②「かかわり合い」の姿を いろいろな角度から見つめた。

- ・子ども同士のかかわり合いを見ていく中で大人や物とのかかわり合いも見逃せない。白グループではリーダーの子どもと教師のかかわり合いがグループ全体のまとまりに好影響をもたらした。青グループでは物を介して子どもたちが互いを意識するようになった。このように 「かかわり合い」の姿を対子ども 対大人 対事物など いろいろな角度から見つめた。

#### (2) 「かかわり合いを育てる」視点から見つめた「部朝の会」

「部朝の会」を「かかわり合いを育てる」という視点から見つめた。その中で 以下のようことが確認された。

①縦割りグループでの活動は学年を越えたかかわり合いの場となる。

- ・上級生が同じグループの年下の子を座る場所まで連れてくる姿がよく見られた。このような経験を通して 同じグループのメンバーという所属意識が育った。

②友だちの良い手本を間近に見てまねることができる。

- ・いろいろな活動の中で友だちの良い手本をまねることで 表現や製作活動に幅がでてきた。縦割りグループの中で友だちの良い手本を間近にまねることにより同年齢集団の中からは生まれにくいダイナミックな表現や製作活動が可能になった。

③友だちの新しい面を互いに発見する場となる。

- ・一人の子どもの得意な面（踊り、歌、折紙、描画など）を発見することで 子どもたち同士が互いに認めたり 認められたりする関係が育った。

④リーダーとしての自覚が育ったことで グループのまとまりがでてきた。

- ・お父さん お母さん役の子がグループの核になって 部朝の会が始まる前にグループの旗を所定の場所へ運んだり グループの子に物を配る姿などがよく見られた。このよう

なリーダーシップの発揮がグループのまとまりにつながったといえる。

### (3) 研究を振りかえって

今年度は「豊かさ」を「人や自然や社会とのかかわり合いの中で その子らしくのびのびと生きること」と捉えた。小学部では それを踏まえて子ども同士の「かかわり合い」の視点から「部朝の会」を見つめた。

実践を行っていく中で 子ども同士のかかわり合いが「部朝の会」の中だけでなく 学校生活の他の場面にも見られるようになった。例えば休み時間に同じグループの子同士が偶然近くにいると名前を呼んだり 給食を早く食べ終わった子が別の教室の同じグループの子のところへ様子を見にきたりする姿が見られるようになった。またほかのグループのリーダーの子に「お父さん」と声をかける子も見られた。全校集会の集合ゲームでは教師の援助をほとんど必要としないで小学部の児童が集まった。これは「部朝の会」で かかわり合いを広げる実践を続けてきた効果の現れとみることができる。

これからも 見つめ合い 認め合い かかわり合いを育てる実践を地道に積み重ねていきたい。

(新 保 利 久)